

全国市街地の変遷

昭和の記憶から次代へ

大大阪時代

大大阪時代とは大阪市が正後期から昭和初期にかけて繁栄を迎えた黄金期をいう。江戸時代は「天下の台所」と言われ、中之島・堂島には諸藩の年貢米を貯蔵する蔵屋敷と豪商の屋敷が集まり西日本の経済の中心として繁栄した。年貢米は船で運ぶため多くの水路と橋が設けられ、大阪は別名、江戸の「八百八町」に対し

「八百八橋」と呼ばれていた。ところが、明治政府が進める諸政策の推進が原因で大阪の地位は低下した。しかし五代友厚、第7代大阪市長・関一（せき・はじめ）の登場で再度繁栄期を迎える。この時期を大大阪時代という。

五代友厚は明治中期大阪経済界で6番目の人口を有する東

インバウンドバブル

相対的地位は次第に低下。78年には人口でも横浜市に追い抜かれた。更に平成バブルの崩壊で大阪の商業・住宅地の価格はピーク時の5分の1以下まで下落し低迷期を迎えることとなった。

大阪経済界の重鎮である。そして1923年に大阪市長・関一が登場する。関市長は道路幅6尺の御堂筋を44尺に拡張するなど、大阪の様々な都市改造事業を積極的に推進。25年には東京府東京市の人口を追い抜き、大阪市を世界で6番目の人口を有する東



訪日外国人観光客が訪れる人気スポット

昭和恐慌からの長期低迷、脱却の機運 グルメ文化に再開発も

昭和恐慌からの長期低迷、脱却の機運

南アジア最大の工業都市へと発展させた。当時の内務大臣後藤新平から「都市計画の範を大阪に求める」と言

わしめた。しかし繁栄は長く続かず、昭和恐慌（30～31年）で繊維・金属産業が大打撃を受け、更に戦後の東京一極集中により大阪の

気観光スポットがある。人気観光スポットの一位は道頓堀、二位は大阪城、三位はU.S.Jで、とくに道頓堀のグリコの電飾広告は「ランニングマン」と呼ばれ外国人観光客にも有名な人気スポットとなっている。そのほか、B級グルメのクオリティの高さによりグルメ文化「くだおれ」の充実度が大阪を訪れる外国人観光客の満足度を満たしていることが、訪日外国人観光客の三人に一人が大阪を訪れる背景となっている。

再び大阪に新大大阪時代が到来するかどうか。大阪グルメ文化「くだおれ」を傳承しつつもJR大阪駅北側の貨物ヤード跡地16畝（梅北2期）の開発、関空と大阪を結ぶ鉄道「なにわ筋線」（31年春開業予定、事業費3000億円）の建設、ならびにIR（特定複合観光施設）万博の誘致、更に大阪市を廃止し諸政策と許認可権等を大阪府に一任し複数の特別区に分割する大阪都構想の実現の成否にかかっているといえる。

大阪市 新「大大阪時代」へ乗り越えるべき課題



④再開発が進み大きなビルが立ち並ぶ中之島 ⑤イチイウ並木の御堂筋

（日本不動産研究所近畿支社、不動産鑑定士・太田雅美